伝道ブックス91

立ち上がる念仏

―被災地 能登からのメッセージ―

竹原了珠

目次

第一部

立ち上がる念仏

■はじめに……2
■人の中に教えは生き続ける……3
■人間の痛ましさ……8
■如来の願いが先にある……11
■遥か過去の経験……17
■善と悪　安心と不安……19
■末代無智の在家止住……24

■様々な思い―人間を教えられる―……29
■不思議なこと……33
■立ち上がる念仏……38
■呼び起こされる人類の歴史……42
■念仏が道となる……46
■おわりに……49

第二部
〈インタビュー〉
令和6年能登半島地震から半年～被災地は今～……53

あとがき……70

【凡例】

・第一部の内容は、二〇二四年五月十二日に小松大聖寺教務所にて行われた「十二日講」での法話を基にしたものです。

第二部の内容は、「公益財団法人 全日本仏教会」発行『全仏』No.662（二〇二四年七月号）に掲載された著者へのインタビュー記事を転載したものです。

・本文中の『聖典第二版』とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典 第二版』を指します。

・本文中の『真聖全一』とは、大八木興文堂発行の『真宗聖教全書』第一巻「三経七祖部」を指します。

表紙写真：津波被害にあった海岸に咲く黄色い花と地震により大きく形を変えた見附島©TAKA—H／PIXTA

第一部

立ち上がる念仏

■はじめに

私は、石川県七尾市にある浄願寺の住職をしております竹原了珠と申します。二〇二四年一月一日に発生しました令和六年能登半島地震で被災をした一人ですが、震災直後から本当にいろいろな様子を見せていただきました。その中で、三年前に亡くなった私の父、前住職との関わりを通して教えられた『仏説無量寿経』の言葉が、また蓮如上人が残された文言が、身に沁みて感じられるようになりました。そのことを中心に、今感じていることをそのままお話しさせていただきたいと思います。

■人の中に教えは生き続ける

今ほど申しました『仏説無量寿経』の言葉とは、「止住百歳」という言葉なのですが、このような文章の中に出てきます。

当来の世に経道滅尽せんに、我、慈悲哀愍を以て、特に此の経を留めて止住すること百歳せん。

（『聖典第二版』九三頁）

〝来たるべき時に仏教の教え、そして道はすべて滅尽する。ことごとく無くなる。けれども、すべてのお経や教え、道が無くなったとしても、念仏の教えが説かれている『無量寿経』だけは百年留める〟という意味

でしょう。百年は人の寿命、一生涯と私は受け止めています。生涯を尽くしていく中にこの仏の教えは生き続ける。絶えさせないということが『仏説無量寿経』の最後に書かれているわけです。「念仏は生き続ける、念仏の教えを残していく」、そういう意味で「止住百歳」という言葉が出てきています。

実は、数年前からこの言葉が気になっておりました。三年前に前住職が亡くなったのですが、その時にこの「止住百歳」を現実の問題を通して実感することができたように思っています。

前住職は亡くなる五年ほど前から認知症になり、最後にはお経はもちろん、幼いころから親しんできた「正信偈（しょうしんげ）」のお勤めもできなくなり

ました。そして、六十年ほどずっと側にいた連れ合いのこともわからなくなり、私たち子どもや孫たちのこともわからなくなっていきました。そのうち、ここが自分の家であることも、自分が何者かさえもわからなくなってくる。様々な人や物事と紡(つむ)がれていたすべての記憶や機能が全部ボロボロと崩れ、ほどかれていく――。そして最後には息をすること、そういった機能もほどかれていきました。

元気なころは、お葬式やご法事、そして法要でもちろんお勤めしていました。けれども私の記憶の中では、一度たりともお朝事(あさじ)、お夕事(ゆうじ)を勤めたことのない住職でした。つまり住職の務めは果たしても、日常生活の中でお念仏を申したり、自ら恭敬礼拝(くぎょうらいはい)したりするような人ではなか

ったのです。けれども、認知症によって、「正信偈」も、家族のことも、ここが自分の家ということすらもわからなくなって、すべての繋がりが途絶していく中で、今まで一度もお参りすることがなかったお朝事に来ていました。気がついたら私の後ろに座っているのです。「正信偈」のお勤めはできない。ですが、私の後ろで念仏の声がずっと響いているのです。お朝事は子どものころから私ひとりの役目でしたし、普段の生活で念仏を称えるすがたを見せることがない父でしたから、かわいい顔をしてちょこんと座り、無邪気に念仏を称えているすがたに、慄いている自分がいました。一体何が父をそうさせたのか、何の力なのか、それはわかりませんが、翌日以降もお念仏を称えていました。

生活の中で念仏申すことがなかった前住職に対して私は、「経道」つまり仏の教えが届いていない、そう感じていました。しかし、認知症になり、習慣も、経験や知識、機能も本人からほどかれていく中で、念仏が立ち現れた。病の有無にかかわらず確かに仏の教えが届いていたことを実感したのです。「これが「止住百歳」ということなのだ」と前住職から教えられた思いでした。

その後さらに症状が悪化し、最後は病院で亡くなりました。この身を生きようとするすべての機能が崩れ去ったすがた、いのちを尽くし切ったすがたは、骸骨(がいこつ)そのものでした。

■人間の痛ましさ

『往生要集』という源信僧都が書かれた書物の中に、「人間」の在りようについて次のように示されています。

人道を明さば、略して三の相有り、応に審かに観察すべし。一には不浄の相、二には苦の相、三には無常の相なり。

（『真聖全一』七四五頁）

人間とは、どんなものを食べても臭い糞尿を排出する、そういった意味で不浄であると。また、病や様々な境遇の中で苦を感じざるを得ない

存在。そして、どんな者であっても命を終えていかねばならない、無常であると示されています。そしてこの後に、無常はどうしても避けられないのだと書かれています。裏返して言えば、弱く頼りない、そして何一つ確かなものをもたない存在としての「人間」なのだ、ということでしょう。

また、この人間の相を説く一段では、人間の体の構成についても事細かに紹介されています。足の裏は、かろうじてわずかにこの大地に接して、この体を支えている。その足裏はくるぶしの一点によって、かろうじて脛（すね）を支えている。この脛の骨は、かろうじて膝（ひざ）の骨を支えている。この膝の骨によってかろうじて骨盤を支えている。骨盤によってかろう

じて脊椎(せきつい)が、脊椎によってかろうじて鎖骨が支えられ、その上にかろうじて頭が乗っているだけの体。それはまるで朽ちて壊れていく家のようだと。この人間が壊れないことを夢見て、何を誇(ほこ)ろうとするのか。あてにならないものをあてにしてすがろうとする人間の痛ましさが『往生要集』の中に書いてあります。

前住職のすべての繋がりはことごとく消えていった。まさに無常です。それまで本人を支えてきたものがすべて滅していく。でも、滅してもなお立ち現れてくるものがある。それが止住せんとする仏の願いです。こういうことを三年前に亡くなっていく前住職から教えられました。この世の中は、教えられる出遇(であ)いに溢れています。私たちがふれている一つ

一つの出遇いの中に、浄土の真実が顕れていると思います。

■如来の願いが先にある

親鸞聖人の主著『教行信証』の正式名称は『顕浄土真実教行証文類』です。これをまっすぐ読んで、浄土の真実の「教」「行」「信」「証」を親鸞聖人が顕したと説明されることがあります。けれども、そのような説明では私はどこかしっくりこないのです。

親鸞聖人は著述を残されましたが、親鸞聖人のこのお仕事以前に、浄土の真実はもうすでに顕れている。私たちのこの世界に浄土の真実が至っている。どういう形で至っているかというと、先ほど申しましたよう